

栃木県結核・感染症発生動向調査情報

(サーベイランス)





令和3(2021)年2月(週報第5週～第8週(2/1～2/28))集計の感染症発生動向調査情報に関する解析結果は次のとおりです。

1 感染症解析情報 {2月は4週間、1月は4週間、前年同期は4週間での比較となります。}

(1)概況

ア. 2月の報告数は次のとおりです。全数(1～5類等)把握疾病は、**347件**(1月**2,108件**)でした。定点把握疾病のうち週報疾病(インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点、基幹定点の週報)は**591件**(定点あたり**3.41件/週**)であり、1月の**524件**(定点あたり**3.34件/週**)と比較し、週あたり**1.02倍**とほぼ同様の水準で推移しています。

イ. 栃木県において報告が多かった主な疾病は次のとおりです。(定点把握週報疾病)

疾病名	報告数	前月との比較(週あたり比)	前年同期との比較(週あたり比)
感染性胃腸炎	349件 (週あたり平均87.25件)	 (1.39倍) 前月は251件 (週あたり平均62.75件)	 (0.56倍) *前年同月622件 (週あたり平均155.50件)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	74件 (週あたり平均18.50件)	 (0.88倍) 前月は84件 (週あたり平均21.00件)	 (0.16倍) *前年同月453件 (週あたり平均113.25件)

- ① **感染性胃腸炎**は、前月に比べ報告数が**1.39倍**とかなり高い水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で**0.56倍**とかなり低い水準で推移しています。全国的には、過去5年間の同時期と比較して、大幅に低い水準で推移しています。
- ② **A群溶血性レンサ球菌咽頭炎**は、前月に比べ報告数が**0.88倍**とやや低い水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で**0.16倍**と大幅に低い水準で推移しています。全国的には、過去5年間の同時期と比較して、大幅に低い水準で推移しています。

(2)全数(1～5類)把握疾病情報(全国)

ア. 1類、2類、3類疾病及び新型インフルエンザ等感染症

結核 1,067件(1月1,044件)、細菌性赤痢 1件(1月1件)、腸管出血性大腸菌感染症 43件(1月81件)、新型コロナウイルス感染症 41,849件(1月143,307件)の報告がありました。他の疾病の報告はありませんでした。

イ. 4類・5類(上位6疾病)

順位	疾患名	件数	前月件数
1	梅毒	378	433
2	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	129	115
3	レジオネラ症	100	85
4	侵襲性肺炎球菌感染症	73	94
5	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	57	60
6	後天性免疫不全症候群	52	78

ウ. 栃木県では次の報告がありました。(計347件)

結核 10件、新型コロナウイルス感染症 322件、腸管出血性大腸菌感染症1件、レジオネラ症2件、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症2件、劇症型溶血性レンサ球菌感染症1件、侵襲性肺炎球菌感染症5件、梅毒2件、百日咳2件

※本解析評価は、速報性を重視しておりますので、今後の調査などの結果に応じて、若干の変更が生じることがあります。

2 疾病の予防解説

県内で発生した感染症のうち、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎について解説します。いずれも感染症法に基づく5類感染症定点把握疾患です。これらの感染症は、手洗いなどによる予防が有効です。日頃から、バランスの良い食事や十分な休養を心がけ、症状があるときは、早めに医療機関を受診しましょう。

疾病名	原因と潜伏期間	症状や特徴	予防対策
感染性胃腸炎	ノロウイルス、ロタウイルスなど多くのウイルスや、細菌、寄生虫など ノロウイルス:1~2日間	主な症状として、激しい吐き気やおう吐、腹痛、下痢、発熱などが現れます。一般に2~3日で軽快しますが、乳幼児や高齢者などでは重症化し、脱水症状などを起こす場合もあります。治療は、ウイルス性の場合は水分補給などの対症療法が中心となります。 また、下痢等の症状消失後もウイルスの排出が1週間程度続くと言われていいます。細菌や寄生虫による場合は、病原体に対する特異的な治療が必要です。	普段から手洗いを徹底しましょう。ノロウイルスは、食品の中心温度85℃~90℃で90秒以上加熱をすることにより感染力がなくなります。おう吐物などの処理は、使い捨てのマスク・手袋等を着用し、しっかりとふき取り、ビニール袋に密封して捨てましょう。おう吐物などがあつた場所を次亜塩素酸ナトリウムで消毒しましょう。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	A群溶血性レンサ球菌 2~5日間	突然の発熱と全身倦怠感、咽頭痛などが見られ、しばしばおう吐を伴います。また、発症早期には白苔に覆われた舌がみられ、その後莓舌となります。さらに、菌の産生する毒素に免疫のない人ではしょう紅熱となり、全身に症状が出ることもあります。 合併症として、肺炎、髄膜炎、敗血症などの化膿性疾患、あるいはリウマチ熱、急性糸球体腎炎などの非化膿性疾患が見られます。まれに、劇症型溶血性レンサ球菌感染症など重症化することもあります。 通常は患者との接触によって感染し、いずれの年齢でも起こり得ますが、学童期の小児に最も多く見られ、家庭、学校などの集団での感染が多くみられます。	患者との濃厚接触を避けることが予防につながります。うがい・手洗いの徹底に努めましょう。 症状が出てきたら、早めに医療機関を受診しましょう。 治療には抗生物質が有効です。リウマチ熱、急性糸球体腎炎などの合併症予防のために、医師の指示に従って確実に内服することが重要です。

(参考) 国立感染症研究所 ホームページ <http://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases.html>
厚生労働省 ホームページ <https://www.mhlw.go.jp/>

※予防解説は一般的なことを記載していますので、不明な点は主治医によく相談するようにしましょう。

3 その他の参考事項

国立感染症研究所の感染症発生動向警報システムにより、2月に県内で発生した警報および注意報はありませんでした。

※国立感染症研究所の感染症発生動向警報システムは、過去の週ごと・保健所ごとの届出数に基づき、届出数が特に多いとき（およそ上位1%以内）に警報が発生されるよう、各疾病ごとに定点当たりの基準値が定められたものです。